

—再審闘争勝利、事実調べ要求— 1.28狭山中央総決起集会開催される。

日刊動労千葉

80.1.3
No. 338

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八(動力車会館)
(鉄電)二二五八・九・(公衆)四五七(22)七二〇七

雨つき、動労千葉青年部80名で参加

1月28日、部落解放同盟・狭山中央共闘会議は、狭山差別裁判の再審闘争勝利と事実調べの要求をかちとるべく、中央総決起集会を開催した。狭山闘争をめぐる情勢は、この1、2月が、再審闘争をめぐる最大の局面を迎えてきており、高裁・四ツ谷裁判官は、再審却下の意図をあらわにしている。こうした状況の中で、部落解放同盟は、1月17日高裁糾弾闘争を行い、全国19都道府県において、10万人にも及ぶ同盟休校を闘い抜き、1月28日、中央集會を明治公園で開いた。動労千葉は、この集會に青年部を中心に80名の部隊をもって参加し、県青年協二五〇名の仲間達とともに、悪天候をはねのけ、闘い抜いたのである。

再審勝利こそ、同盟休校に答える闘いノ

—石川氏アツピール—

集會は、16時30分頃より、部落解放同盟中央本部主催の前段集會が行われた。野本中執の司会で、松井委員長の挨拶、西岡中執の基調報告、つづいて関東各都県連の決意表明が行われた。連帯のあいさつとして三里塚・芝山連合空港反対同盟より石毛常吉、市東東市両氏がたち、三里塚・狭山の連帯した闘争で、80年代の人民解放をわが手で勝ちとろうと訴えた。

18時から、集會は解放同盟・部落解放中央共闘会議主催による統一集會へと盛りかえられた。

統一集會では、特に、同盟休校を闘った長野県連子供会からの特別報告や、東京都連子供会のアピールが行われ、大きな拍手が送られた。また、獄中で不屈に闘い続けている石川氏のアピールが読み上げられた。

石川氏は「同盟休校の闘いに全国で決起されたことを聞き、感激の涙を禁じえません。身を切られる思いです。この闘いに答える道は、再審に勝利し、無実をかちとる以外にないと考えています」と固い決意を表明し、全参加者は、熱い拍手で奮闘を誓い合った。

シュプレヒコールが、おりからの雨空をはねかえし、1万名の参加者は部落解放同盟を先頭に「石川氏実力奪還、再審棄却阻止」の決意も固くデモ行進に移った。

全参加者の糾弾にいたたまれず、途中で逃げ出した動労「本部」反動集団ノ

ところが動労「本部」反動集団は、この重要な集會に真面目にとりくみ参加することもせず、集會に遅れること1時間55分の17時55分頃になってやっと二五〇名でやってきたかと思うと、傍若無人にもいきなり集會中の演壇の真正面に入りこ

うとした。この高慢で不真面目な彼らのふるまいに、当然にも多くの参加者より激しい糾弾の声が上り、立ち往生してしまったのである。

おまけに、狭山闘争を闘う者の共通の常識としての「ハチマキ・ゼッケン着用」の申し合わせもふみにじって(どういう魂胆か?)全員ヘルメット着用で参加するという不真面目・非常識・おごりに対し、全参加者の「何しに来たんだ!」の激しい糾弾が浴びせられ、主催者からも厳重に抗議され、ヘルをとることで、一応参加を認められた。ところが、集會にしばらく参加していた動労「本部」青年部はまたもおどろくべきことに、まだ集會が終ってもいないうちに、演壇の前をぞろぞろ通り抜け、とにかく一刻も早く逃げ出したいとばかりに集會を踏みこむ暴挙をくり返したのである。デモ隊列は、解同↓中央共闘↓支持共闘の順であり、当然にも参加者・主催者からふたたび激しく糾弾されるというありさまであった。

このように、動労「本部」反動集団は「なんとか登場しました」というアリアバイは出来たものの、全く、狭山を真面目に闘う気はみじんもなく、どこからも相手にされず、糾弾の声に消耗するのみであった。かつて狭山闘争に、水本デマ運動を持ちこみ、会場混乱を狙い、集會破壊を行ってきた彼らが、今や、「水本」すら持ちこむことも出ず、主催者側のみならず、集會参加者の全体からも糾弾され、こそこそ逃げだすような所まで至っていることが、鮮明につきだされた集會であつた。

全組合員のみなさん!

われわれは、当面する闘争課題である国鉄35万人体制攻撃に対する反撃の闘いの長期的展開とともに、狭山闘争の全国的高揚と、再審勝利へ向けた闘いを部落解放同盟との力強い連帯をかちとる中から、総力で闘い抜こう。